2023年度 第5期 311ゼミナール
学校避難班活動報告書

メンバー

佐々木侑里(M1年)、石川あいり(3年)、綾部愛美(3年)、伊藤紬(3年)、

舩山雄太(3年)、二階堂颯映(3年)、村上真綺(3年)、采澤七海(3年)、本間陽菜(2年)

森彩花（1年）、菊地愛香（1年）、上野愛莉（1年）、小原梨紗（1年）、千葉大輝（1年）

目次

○目的……p. 2

○調査方法・ 対象……p. 2

○調査結果
１．避難訓練
①気仙沼市立大谷小学校視察……p. 2
大谷小学校について
下校時避難訓練の概要
気づいたこと
参加した児童・教員の感想
今後の課題・提案
②聖ウルスラ学院英智小・中学校「光クラブ」避難訓練……p. 4
聖ウルスラ学院英智小・中学校「光クラブ」について
避難訓練の概要
気づいたこと・課題と提案(報告書より)
報告書を受けて(光クラブより回答)
③避難訓練の総括

２．ワークショップ……p. 8
ワークショップの概要
クロスロードについて
体験した内容（問題、回答例、豆知識）
参加者の感想
気付いたこと
ワークショップの総括

○来年度に向けて（片平小の取り組みも）……p. 12

○学生の感想……p. 12

目的

「教員になる宮教大生に避難訓練をプロデュースする」という最終目標に向けて小学校の訓練を評価し改善案を提案する。また、WSを通してよりよい避難訓練について考える。

調査方法・対象

・実際の避難訓練に参加し、その様子を観察する。
・チェックシートを用いて訓練の評価、課題を考える。
・避難訓練に関して教員にアンケートを行う。
・対象は気仙沼市立大谷小学校、聖ウルスラ学院英智小・中学校(光クラブ)の2校とする。
・田中勢子さんのWS(クロスロードゲーム)から災害対応を考える。

調査結果

１．避難訓練

①気仙沼市立大谷小学校視察

◆大谷小学校について

　気仙沼市南部・本吉地区の学校で児童数129人。大谷海岸から約400ｍの場所に位置し、東日本大震災で犠牲者も出た。幼小中の合同避難訓練など地震津波対策の取り組みに力を入れており、下校時避難訓練もその一環として実施している。昨年、避難訓練グループは幼小中公の合同避難訓練を視察させていただき、地域全体で避難訓練に取り組む重要性や、異学年交流による良い影響を学ぶことができた。
(〒988-0273　宮城県気仙沼市本吉町三島28)

◆下校時避難訓練の概要

〇調査日時　2023年5月10日(水)
〇調査場所　気仙沼市立大谷小学校

〇ねらい(学校の計画書より)
・下校時の避難の仕方を体験的に学び、登校時に地震が発生した場合の危険や身の守り方を理解させる。
・地区ごとの一時避難場所や避難経路を理解させる。

〇実施概要
・５・６年生は事前学習を実施し、地図上で危険個所や避難先を確認する。

・当日は校庭に集合後、担当の安全防災主任畠山昭洋先生から訓練の意義や注意点を受ける。
・10地区に分かれて、上級生が下級生を導き、教員付き添いの下で下校する。
・下校途中で危険個所を確認する。
・地震発生の知らせで、一斉に身を守る行動をとる。
・安全確認後に下校を継続し、自宅へ帰る。

◆気づいたこと
〇整列時
・学童に通っている児童は人数が多く、整列し終わるのが遅かった。
・いつもは集団下校をしていないからか、整列の際に順番が決まっていなく、並び直す時間があった。
・先生の話が始まったら先生の方を見て話を聞くことができていた。

〇下校時・地震発生時
・危険場所について考えながら下校することで、避難訓練というより危険箇所確認訓練のようだった。
・途中まで迎えに来ている保護者と教員の会話から、コミュニケーションを普段から取れる関係性があり、信頼関係が築けていることを感じた。
・地震発生のアナウンスが「訓練訓練、大きな地震が発生しました。直ちに避難行動をとってください。」と教師が言う形であった。臨場感を持たせるため、もう少し工夫できるのではないかと思った。
・上級生は前年に行った下校時訓練の経験を生かしているように感じた。

〇児童の様子について
・校舎から出てきてすぐ周りに声をかけ並び始める、地区リーダーが積極的にプラカードを取りに行き並ばせるなど、高学年が中心となって整列していた。
・地震発生の合図の後に、ダンゴムシのポーズはとれていたが、周りを見ずにその場で丸まっていたため、機械的になってしまっていた。
・児童は知識としての避難行動は知っていた、1年生もどう行動するのかを把握できていた。一方で、先生や上級生の行動を伺っている児童もおり、避難行動に関して知識としては知っているがこの行動が正しいものなのかどうかという迷いがあるのではないかと思った。

・海抜がどのくらいなのか確認していたが、下級生は理解できていたのか疑問に思った。
・低学年の児童より、高学年の児童のほうが先生の質問によく反応していた。
・学童に通っている児童は、高学年よりも1年生の方が意識が高いように見えた。幼稚園で練習したのを覚えていると言っていた。

〇教師の様子について

・実際にどこまで津波が来ていて、次はここまで来るかもしれないというのを先生が把握していた。そこから教師側の防災意識が高いことが伺えた。
・危険箇所を見落とした児童に気付き、身の守り方をきちんと指導していた。
・訓練の大切さを教える教員の熱意を感じた。
・教員が自分の経験を交えながら津波の話をしていた。児童も興味津々で聞いていた。
・ダンゴムシポーズのときに教員がやって見せながらアドバイスをしていた。
・避難訓練に関する声掛けだけではなく、「疲れてきた？　大丈夫？」「水飲む？」「車来たよ」といった声掛けも行っており、教員の視野の広さに感動した。
・絶対にわかるだろうという質問も児童に投げかけ、やり取りをしていた。知識の定着になると思う。
・車が通るたびに帽子を取り、お辞儀をしている教員の姿が印象に残った。
・先生の声掛けの仕方が素晴らしかった。
・様々なやり取りをした後、「ここで地震が来たら」と必ず、最後にまとめを話していた。

〇その他
・去年の雨天時での幼小中公合同避難訓練の記憶がしっかり残っていた。天候に左右されず、実施することが大切だと感じた。
・保護者が途中から見守っていた。

◆参加した児童・教員の感想、感想からの気付き
〇高学年の児童
・「1年生のときからずっと訓練はやってきた。意味が分かったのは3年生ぐらいから。登校は車、下校は歩き、ふだんは友達とふざけながら歩いているので、地震や津波は意識しない。だから、年に一度、こうして先生と一緒に歩いて危険な場所や避難先を確認できるのは意味があると思う。家族とは震災の話は、よくする。避難先についても家で話し合っている。訓練でそれを確認する意味もある」。
　「仙台ではこういう訓練はやっていない」と伝えると、「えー、なんで。それは絶対にやったほうがいい」と言っていた。(6年女子)

・「津波の避難先について家では決めていて、この通学路のあたりでも複数確認はしている。ただし、実際には歩いて登下校していないから、訓練はビミョーかも。やる意味は、少しある、よりもちょっと上ぐらいの感じかな」と言っていた。(5年男子)

・この訓練で避難の仕方や、避難場所が身についていると思う？と聞くと「、、、あんまり？」と答えていた。　毎年避難訓練をしているので、先生がいなくても自分で避難行動をとれそう？と尋ねたところ、「はい」と言っていた。(6年女子)

・「避難訓練どうでしたか？」と聞くと「できた！やってよかったなと思う」と言っていた。「先生がいなくても避難できそう？」と聞くと「はい！自信はある」と言っていた。(5年女子)

・「もし災害が発生して先生がいなかったとしてもできそう。今まで何回も避難訓練を行ってきたから身についていると思う。」（6年男子）

・「何回か行っているから少し慣れてしまってきているところがある。お家の人とは、地震が起きた時の話をあまりしていないのでしようと思った。友達は避難グッズを用意している。」（6年女子）

・「先生がいなかったり、周りに誰もいなかったりしたら落ち着いて安全な行動がとれるか不安。避難訓練をしたり災害について触れる機会はあったりして頭では分かっているもののいざとなった時行動できるか分からない。今までの避難訓練で印象に残っているのは雨の日に行ったこと。災害が起きたら、どんな天気でも避難しないといけないと感じられたから。」（5年女子）

　高学年児童ほど避難訓練の意義を理解している児童が多い。毎年継続して避難訓練を行うことが、児童の避難行動への自信につながっていると考えられる。一方で少し慣れてきていると答えた児童もおり、ただ同じ内容を繰り返すだけではいけないと感じた。

〇中学年の児童

・「東日本大震災が起きた時はまだ生まれていなかったので、よく分かっていなかったが、気仙沼伝承館に行って、地震・津波の怖さを知ることができた。本当にそんなことがあったのかと思うと考えられない。でも今日はそれを意識して避難訓練できたと思う。」
(4年男子)

・「避難訓練は意味があると思う。みんなと帰れて楽しかった。」(3年男子)

・「避難訓練どうでしたか？」と聞くと「できた！」と言っていた。（3年女子）

・「午前中の伝承館の話も聞くことができた。津波をなめていたけど、怖いものだと分かった」と言っていた。また、「車が流される様子や、津波が黒いことを知った」と言っていた。訓練中どんな危険をみつけたかを聞くと、落ちてきそうな看板がたくさんあることを教えてくれた。「看板が落ちてくるかもしれない、俺は看板19個もみつけた」と言っていた。
　先生がいなくても自分で避難行動をとれそうか聞くと、「一緒に帰る友達とできると思う」と言ってくれた。（4年男子）

・訓練中どんな危険があったか尋ねると、今まで教員と確認した「看板や電柱、川や崖」といった今までの危険なポイントをしっかり覚えていた。教員がいなくても避難行動がとれそうか聞いたら、最初は首をかしげていたが、「やってみればできるかも」と言ってくれた。（4年男子）

　4年生はこの日の午前中に伝承館の見学をしていた。この経験が避難訓練参加への意欲付けになっていたように感じる。通学路の危険の事前学習を行ってないこともあり、普段目にとめないような危険や避難看板に対する興味・関心が強かった。防災について興味をもつ機会になっていたように感じる。

〇低学年の児童

・「訓練の意味は知っているか」と尋ねると「地震や津波が来た時に身を守り、逃げられるかどうかを確かめるため」と正確に答えた。「津波が来たらどうするの」と尋ねると、「海から離れたところに逃げる」と即座に答えた。（1年男子）

・「避難訓練どうでしたか？」と聞くと「できた！」と言っていた。（1年男子）

　当日の朝にも繰り返し避難訓練のことを教員が話していたとお聞きした。教員の質問に対してしっかり答えを復唱できていることに感心した。低学年の児童は、繰り返し言葉にすることで知識が定着するのだと考えた。防災学習は日頃の積み重ねが大切であることを身に染みて感じた。

〇教員の感想

・「いろんな地区を年ごとに担当して訓練を行っている。校区内の事情が把握できる意義は感じている。避難訓練は、同じ地区の子どもが学年を超えて互いを知る機会になるし、それはそれで実施する意義はあるとは思う。」(A教員)
・「昨年度も同じ地区を担当し、同じように訓練に取り組んでいる。去年と同様に実施できた。１人でいるときに地震が起きたら、児童はパニックになってしまうと思う。児童は歩いていてあんまり危険な物や、津波のマークに気が付かないんだなと思った。児童からの反応や気付きを待っていたが、なかなか児童から声が上がらず、自分から話しかけてしまった。いつも車で送り迎えされている児童が多く、後半は集中力が切れていたかもしれない。」（B教員）

・「場所によって残った家と流された家がある。この通りも随分違う。毎年、一か所一か所丁寧に指導している。子どもたちが気づけるように普段から気付いた時に指導するようにしている。判断に迷ったときに、ある程度どう考えるかを教えてあげないと悩んで逃げないこともある。地震の後の津波が厄介だと考えている。」(C教員)

・「(家庭と児童と学校が子どもたちの中でつながっていないという点が話になり)お家の人に子どもに指導してくださいとは言ってあるんですけど、だからと言って我々とお家と子どもたちが皆で、じゃあここに逃げればいいよね、みたいなのはないので、それが出来れば…。上の学年にどれだけ声かけても…個性がでる。学童児童は入ってきた後にもう終わりだとスイッチをオフにしてしまっている状態。学童児童の避難訓練としては、あなたたち(5年生たち)がリーダーとしてその時改めて練習しようね、と言いたい。」(D教員)

大谷小の児童は普段車の送り迎えで通学している子が多く、慣れない通学路での避難となったと多くの教員が考えていた。児童からの気付きや児童の考えを尊重する一方で、自分から答えを言ってしまったり、適切な考え方を教える必要性を感じているように思う。命を守る行動を学ぶ以外にも、避難訓練には異学年で関係を築くなどの効果もあり、実施する意義は大きいと考える教員もいた。すぐに避難訓練が終わってしまう学童児童への効果的な声掛けや取り組みに悩んでいるようだった。

◆今後の課題・提案

〇課題

❶「避難訓練にいかに臨場感を出し、子どもたちの主体性を引き出せるか」

臨場感を出すことで、子どもたちが本当に災害が起きた時に慌てずに避難行動をとる力が身に付くと考える。実際の警報音や揺れる音を使用すること。教員も避難行動を一緒にとること。すぐに身を守るのではなくて、落ちてくるものが無い安全な場所で身を守る行動をとること。どれも些細な違いだと思われてしまうかもしれないが、子どもが訓練を真剣に行うスイッチが入る工夫だと考えている。できる工夫からすぐに取り入れていければと考えた。

❷「家庭との避難訓練意識の共有」

通学路の途中まで児童を迎えに来ている保護者が複数人いた。そのため、通学路の途中で危険な場所の学習が終わってしまっている児童がいた。実際に避難するときは家までの避難となるが、迎えが来ている児童は家までの避難訓練になっていなかったように感じる。各家

庭に様々な事情があるため、迎えに来るのを止めることは難しいとは思うが、児童の体験のために家庭の協力を得ることも大切だと思う。

〇提案

❶「指導型・対話型の避難訓練」

避難訓練だからと言って静かに下校してしまうと、児童内の気付きや思考に頼る形になってしまい、本当に分かっているか不安に感じた。避難訓練ではなくなってしまうが、対話しながら下校時避難を行うことで防災意識の定着や協同的な学びをすることができるのではないか。

❷「学び合いの避難訓練」

高学年の児童が前年に行った下校時訓練で見つけた危険な場所や教訓などを下級生に教える訓練を行ってみたらよいのではないだろうか。人間の理解には「できる」「スラスラできる」「説明できる」の3段階がある。「人に説明できるまで避難訓練をマスターしよう。」と声掛けることで、やっただけで終わりの状況を防げるのではないかと考えた。また、その場で学んだだけの「短期記憶」とならず人に話したエピソードとして「長期記憶」に発展させることで、子どもが学校を卒業した後も、命を守る防災の知識が残るような活動にしたいと考えた。

❸「追加学習」

せっかくの良い避難訓練なので、一回で終わらせず、違う形でも通学路の危険な場所を知ることで知識を更に強めたいと考えた。可能であれば何回かに分けて避難訓練を行ったり、ほかの方法を使った学習を訓練にプラスαで取り入れたりするといったことも必要なのではないか。

②聖ウルスラ学院英智小・中学校　英智光クラブ

（〒984-0828　宮城仙台市若林区一本杉町1-2）

◆聖ウルスラ学院英智小・中学校　英智光クラブについて

・児童

・英智光クラブ（学童保育）

1年生から４年生までの児童が所属し、専属スタッフと学生ボランティアがサポートしている。光クラブの活動中に避難が必要な際のマニュアルはあるものの実際に訓練を行ったことが無く、確認のために今回の訓練が実施された。

◆避難訓練の概要

調査日時　2023年８月４日（金）

調査場所　聖ウルスラ学院英智小・中学校

活動の概要

避難訓練の撮影、チェックシート、引き渡し訓練の見学、訓練後反省会

ねらい

⑴　1年生から４年生までの児童が、光クラブの活動中に大きな揺れがあった時、子ども達が落ち着いて素早く行動し、安全に避難ができる方法を身に付ける。

⑵　光クラブ児童と職員及び大学生ボランティアの防災意識を高める。

⑶　光クラブ災害対応ハンドブック（児童用）及び災害対応ハンドブック（職員用）の検討。

想定

⑴　多目的ホールでの活動中に「緊急地震速報」が鳴り響く

⑵　大きな揺れを感じる

⑶　地震の影響で建物に被害が予想されることから、校舎外に避難

訓練の流れ

10：00　大規模な揺れ　その場で机の下にもぐる

10：10　避難指示

10：15　避難開始

10：20～10：25　メディアセンター前で児童数等確認

10：30～10：35　グリーン広場へ移動

10：45～11：15　保護者へ引き渡し訓練

◆気づいたこと・課題と提案

【訓練開始前と初動】

■気づいた点

・地震を知らせる音が緊急地震速報の音だった。
・速報が鳴ってすぐに机の下に隠れる児童が少なかった。
・学生ボランティアが「机の下に隠れて」と言うと隠れていた。
・話し声や笑い声も聞こえた。
・学生ボランティアのほとんどは机の下に隠れていなかった。
・事前の説明が詳しかった。
・「机の上の水筒を手元に！」「机の脚をもって！」などの声掛けがあった。
・整列の際「全然怖くなかったよ」とスタッフに話したり、児童同士で話したりしていた。
・整列がスムーズで、集合させてからかなり短時間で避難を開始していた。

■課題と提案

①準備しすぎている（初めての訓練だから仕方ないが、全員が訓練に身構える感じだった）
→その日に訓練があることは通告しても、時間は予告せず、いつ来るかわからないようにするとより現実的ではないか
→スタッフの人数もいつも通りで実施することが良いのではないか
②緊急地震速報の音が鳴った後、すぐに隠れていなかった
→速報が鳴ったら身を守る行動を取るのか、声掛けがあってからなのか、明確にしておくと良いのではないか
→緊急地震速報ではなく、グラグラ…といった地震の音の後、実際に放送で流れるような指示を出すと良いのではないか（北六番丁小ではそのように実施している。放送で流れるような指示は「訓練　訓練　地震です。身を守る行動を取りましょう」など）
→むしろ、あえて指示を出さず、どのような行動を取るか見るのも良いのではないか
③スタッフの役割分担があらかじめ決まっていて、スムーズ過ぎた

→指示役だけ決めておき、「〇年生お願いします」「救急箱お願いします」などとその場で指示を出すようにすれば、スタッフの訓練にもなるのではないか
④多目的ルームの出入口はガラスで、片開きのままだった
→両開きにして出入口の移動を確保する、ガラスの扉が壊れて通行できない場合を想定して隣の扉を使う、どちらも通行できれば２列になってどちらからも通行できるようにする、といった指示もあってよいのではないか

【避難の最中】

■気づいた点
・移動がかなりスムーズだった。
・思っていたより避難が早かった
・４年生と３年生の間が空いていた、４年生を手本とするなら間は空かない方がいい。
・昇降口の出口の避難が窮屈そうで時間がかかった。
・「もうちょっとだよー」とスタッフの優しい声掛けがあった。

■課題と提案
①「おはしも」のほかに「て」（低学年を優先する）を児童も口にしていたことを考えると、上級生からの避難で良かったのか
→避難の順番を低学年からにすると良いのではないか
②メディアセンターでの点呼は必要だったか
→メディアセンターは屋内で、倒壊や火災の危険もあり得る
→いち早く安全な場所に移動するのが肝心だから、メディアセンターでの集合、点呼は省いても良いのではないか
③全員が避難できる設定にすると、本番の想定にならないのではないか
→行方不明、けが人を想定して、訓練に取り入れてみてはどうか
→学生がトイレで孤立している児童、けがをして動けなくなっている児童の役を担い、多くが屋外に避難して点呼したところ、まだ避難できていない児童に気づき、探しに行くという設定も可能ではないか
④昇降口の避難を狭い通路を一列に通っていた
→他の出口にも誘導させ、空いているところから素早く避難させると良いのではないか
→昇降口が靴箱の倒壊などで逃げられなくなった設定にして、ほかの出口を探しての避難ルートを探す想定もすると良いのではないか
⑤外に出た後、４年生は走っていたが、３年生以降は歩いていた（捻挫していた子がいたようで３年生以降は４年生に比べると避難がゆっくりだった）
→外に出た後は走るのか、走らないのか、急ぎ足なのかを統一すると良いのではないか

【引き渡しとその後】

■気づいた点・課題と提案

①引き渡しをしている時間が長く、児童の待ち時間が長かった
→その時間に児童を安心させる工夫ができるのではないか(児童を落ち着かせる、児童とお話をする、歌を歌う…などの工夫があってもいい)
②トイレに行きたい児童に付き添ったことで担当者がいなくなったことが気になった
　→持ち場から離れる際には他のスタッフに声を掛けると良いのではないか
③引き渡しを学生ボランティアが実施して良いのか気になった
　→引き渡しは重要なので、学校側の職員や先生たちがするのが原則ではないか
④引き渡しカードの書く項目が多く、時間がかかった
　→引き渡しの際の紙は、事前に記入したものを持ってくることになっているそうだが、紙を忘れた場合など、事前に作ってある名簿のチェックで済ませるといった工夫も検討したほうがいいのではないか
→いずれにしても、引き渡しの列が長くなって混乱しないようにしたほうがいい
⑤避難訓練と引き渡し訓練を一連のものとして実施していいか
→引き渡し訓練は手続きを確認するものなので、避難訓練とは性格が違う
→別の設定で別の日に実施したほうがいいのではないか
⑥訓練シュア終了後に防災クイズをしたのはとても良かった

◆報告書を受けて(光クラブより回答)

　避難訓練終了後、報告書と質問事項を作成し光クラブ職員に回答していただいた。その結果が以下の通りである。

【訓練開始前と初動】

①準備しすぎている
・児童への時間の予告について、今回は初めての単独の避難訓練だったためあらかじめ知らせたものだったが、今後は保護者にだけ知らせる形で実施したいと考えているそう。また、スタッフの人数についても避難訓練の共通理解のために多くのスタッフが参加したとのこと。
②緊急地震速報の音が鳴った後の行動

・緊急地震速報の音が鳴った後すぐに隠れていなかったことについて、「光クラブ災害対応ブック」を用いて指導・確認を行っている。学年によって理解できていないこともあるため、指導・確認の機会を作りたいとのことだった。
・「グラグラ」といった地震の音を使用してはどうかという提案に対して、光クラブ単独の避難訓練のため、学校の放送設備は使用しなかったが、学校との調整が必要になり今後の参考にしたいとのこと。
・あえて指示を出さずに児童たちがどのような行動をするのか見ることの提案について、1年生から4年生の児童が所属しているため、避難時の行動の基本を徹底させるため声掛けをしたとのことだった。

【避難の最中】
①避難させる学年の順番
・なるべく早く全員が避難するには、1年生が先頭より4年生が先の方が良いと考えたそう。光クラブでは、日々の活動においても4年生がリーダーに位置づけており、イベントや調べ学習に於いてもそうしていることから、避難の際も4年生が先であった方が、万が一スタッフが少ない場合でも、より安全で早い行動ができると考えた。また3年生は4年生に続き、スタッフは低学年に付き添うことができるとのこと。
②メディアセンターでの人数確認の必要性
・今回は多目的ホールに全員いる状況での避難訓練だったが、普段時活動場所は時間帯によって分かれる場合もあることから、いったん、安全と思われる場所に集まって、当日利用している人数の確認をしてから避難所(グリーン広場)に向かうことを考えた。仮に、全員で避難所(グリーン広場)に行ってから行方不明者等がいた場合、捜索等に遅れが出ることも考えられるとのこと。
③ 行方不明、けが人を想定した訓練
・「行方不明者・けが人」については、避難訓練計画した段階では、是非やってみたいと考えていたが、初めての避難訓練では、児童のことも考えて、ハードルが高いと判断し見送ることとした。今後、回数を重ねていって、実施できればと考えている。
④昇降口付近
・一つの出口から一列で避難していることは、想定外でした。次回の避難訓練に明記したいと思いますとのこと。
⑤昇降口から出られない場合(靴箱等の倒壊等で)の想定
・次回の避難訓練までに、他の利用可能な出口の有無についても確認しておくとのこと。
⑥外に出た後は、走るのか、走らないのか、急ぎ足なのか

・外に出た後は、走るのか、走らないのか、急ぎ足なのか事前に話し合うことの提案について、今後の参考にさせていただきますとのこと。

【引き渡しとその後】
①引き渡し中の待ち時間の児童を安心させる工夫
・東日本大震災、保護者が迎えに来るまでの時間は想像を超えるほどの時間がかかったと聞いている。避難訓練の事前指導でもそのことに触れて児童には話してきたが、ご提案のとおり、安心させる工夫は必要だと考える。
②スタッフ同士の声がけ
・トイレに行く児童に付き添って持ち場を離れる時は、他のスタッフに声がけをすると良いのではないかという提案について次回の参考にさせていただきますとのこと。
③引き渡しの担当
・今回は、光クラブ単独の避難訓練のため、学校からは光クラブ担当職員のみの参加となった。もちろん、学校主催の避難訓練となれば、係分担は今回とは違ってくるとは思うが、光クラブの学生ボランティアは、常に私達スタッフと意見交換を行い、共通理解を図り、児童の安全面においても注意をはらってくれていることに感謝しているし信頼している。
④ 引き渡しカードに記入する項目・引き渡しの流れ
・児童の命を引き渡すと考えれば、記入項目が多いとは考えていない。何度かやっていくうちで変更もあるとは思うが、災害の時に、いつも迎えに来ている保護者が迎えに来るとは限らない。帰っていく先が、自分の家とは限らない。後で連絡が取れないようでは困る。等々考えると現段階ではこのままでよいと考える。
⑤避難訓練と引き渡し訓練を一連のものとして実施するか否か
・引き渡し訓練は、手続きを確認するものなので、避難訓練とは性格が違うと思うので、別の日に実施した方がいいのではないかという提案に対し一連のものと考えているので、今後も一緒に実施したいとのこと。
⑥避難訓練終了後の防災クイズを用いた振り返り
・どうしたら楽しく、確実に児童たちに理解してもらえるかということで、クイズ形式にしたものです。今後も工夫をして児童の理解を深めていければと思います。

③避難訓練の総括

大谷小学校による下校時避難訓練、そして聖ウルスラ学院英智小・中学校　英智光クラブによる避難訓練の２つの訓練視察を経て私たちは避難訓練のあり方について考察した。考察した事柄について以下の４つのポイントにまとめる。

❶訓練見直し、行動を起こす大切さ

計画で終わらず、実践に移す行動力が必要であると感じた。今回視察した光クラブの訓練は、今年初めての試みであった。何もない状態から訓練を計画し実行するには、相当な熱量が必要である。しかし、評価改善し、継続的に実施していくことも大切である。

また、大川小で聞いた佐藤敏郎先生の話の中で、自分や大切な人を登場人物として訓練について考えるという話が特に印象に残っている。マニュアル通りの行動で本当に命を救えるのか、訓練に教職員や児童生徒を落とし込んでいるか、自分事として考え行動していくべきである。

❷教室外での避難行動

みなさんは外にいる時に大きな地震が起きたら、どうしますか？
教室内の避難行動は何度も確認・実践する場があるが、教室外で机がないところでの避難について子どもたちは弱いと考える。大谷小では、教員の声掛けに対し、子どもたちはすぐ避難行動をとることはできたが、すぐそばに看板や電柱がある場所であった。その場の環境に合わせて頭を守る方法であったり、周りに落ちてくるものが無いか等、咄嗟の判断力が求められると思う。地震発生時、子どもがどこにいるかは予想できない。どこにいても命を守れる行動をとれるように、学校で訓練していく必要があると考えた。

❸避難訓練と防災教育の融和性

避難訓練と防災教育は融和性が高いと感じる。大谷小では下校訓練しながら先生による防災についての指導が行われており、光クラブでは訓練終了後に学生スタッフによるミニ防災授業が行われた。避難訓練の事前・事後学習はどの学校でも行っているが適当にやるのでは意味がないと考える。大谷小の実践例のように地域密着実践が理想であると考えられるが、学童といういつもと違う場所でいつもと違う先生ってといったように、決まった型にはまらぬ防災教育が効果的だと感じた。またそのような型にとらわれない防災教育のあり方についてもっと考えられるとも思う。グループ内では、教員が地域理解をして、地域の人々が交流する機会を活用していくことが大切だと意見が挙がった。

❹地域の魅力に触れる防災教育

大谷小学校の児童に「この街の魅力は？」と聞いたところ、口を揃えて「海がきれい！」と教えてくれた。海には2つの側面がある。1つは、時に恐ろしいものになるという面だ。海は津波という恐ろしいものを作り出すのである。もう1つは私たちの生活にとって欠かせない資源であり、その地域ならではの魅力であるという面だ。防災学習で津波について学ぶと児童からは「怖い」「恐ろしい」といった意見が出ると思う。意見通りだと思うし、二度と起こってほしくないことであるため、教員はそこから児童に命を守るための知識を身に付けさせたり、行動を促したりすることが求められると思う。しかしそれだけではなく、海の豊かさ、美しさ等の魅力に関しても同時に指導することが求められるだろう。将来教員になったら、「自然の脅威」と「自然の恵み」どちらも学ばせていきたいと考える。

２．ワークショップ

「あなたならどうする　クロスロードゲームで災害対応を考える！」わしん倶楽部　代表
防災教育コーディネーター　田中勢子さん

〇活動の概要

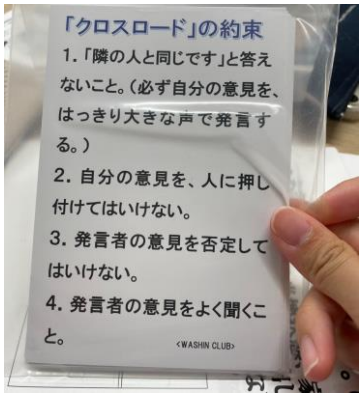
・活動日時　2023年10月7日　9：30～11：30
・活動場所　410教室
・活動内容　クロスロードゲーム

〇クロスロードとは？

・「クロスロード」（Crossroad）とは、「岐路」、「分かれ道」のことで、そこから転じて、「重要な決断、判断のしどころ」を意味する。
（参考サイト：とりネット「防災ゲーム クロスロード」、https://www.pref.tottori.lg.jp/secure/633910/12_3crossroad.pdf
、最終閲覧日：2024年1月17日）
・阪神淡路大震災の後、震災について後世に伝えたいということで、当時の文科省のプロジェクトを立ち上げ、矢守教授（京都大）、吉川教授（慶応大）、イラストレーターの網代さんの3人がクロスロードゲームを創始した。
・今回のクロスロードは、阪神淡路大震災の時の神戸職員の実話を基に作成されたものである。
・「クロスロード」の特徴としては、先述した「重大な分かれ道、人生の岐路」の他に、人と人が出会い、活動する場所になったり、正解のないゲームを目指す。

◆クロスロードの準備物について
・設問(カードかプリント)
・YES/NOカード
・座布団(青・黄/金)(グループの机の中央に山にしておく)
・クロスノート(各グループに設問数分)
・白紙(アイスブレイキング用)
・ホワイトボード(青・赤・黒のマジック)
・筆記用具

◆クロスロードの基本ルール(各グループ5人か7人の奇数人で行う。



1.アイスブレイキング：自己紹介やリーダー、書記を決める。
＊A4の紙を三角に折り、名前、好きな食べ物などを書いて回すと自己紹介に。
→この紙は話し合いが終わった人は伏せてくださいと伝えると、進捗把握にもつながる。
＊顔見知りだとしても必ず行うようにする。
2.設問の把握：設問に対して自分の意見をYes/Noで決める。
3.意見の提出：同時に決めた答えのカードを裏向きでテーブルの上へ。
4.開示：カードをひっくり返す。(体育館等でやる際は、上にあげる。)
5.座布団の分配：多数派に青座布団を渡す。もし少数派が1人だけだった場合には金の座布団を渡す。もらった座布団はゲーム終了まで手元に置いておく。
6.話し合い：Yes/Noという自分の意見を選んだ理由をもとに話し合いを行う。
＊ホワイトボードに書くことで意見を可視化しやすくする。

◆クロスロードのお約束
‣ゲーム後の意見交換の時
　①必ず自分の意見を、はっきり発言する。
　②自分の意見を、人に押し付けない
　③発言者の意見を否定しない
　④発言者の意見をよく聞く

〇体験した内容（問題、回答例、豆知識）→Wordで編集するときに工夫する！
＜ケース１＞
問題　立場：被災者(市民)
地震で自宅が半壊状態、家族そろって避難所へ。ただ、日頃の備えが幸いして非常持ち出し袋には、水も食料も3日分はある。避難所には水も持たない家族が多数！その前で、あなたは非常持ち出し袋を開ける？

Yes：〔非常持ち出し袋を開ける〕非常の際に用いるために用意してきたので、使いたい。
No：〔非常持ち出し袋を開けない〕中には持ち出し袋を持っていない人もいる。人の目を気にしてしまうため、こっそり開ける。

豆知識　どんなものを食糧として備えたらよい？
・農林水産省からストックガイドが出ている（健常者用／要配慮者用）https://www.maff.go.jp/j/zyukyu/foodstock/guidebook.html

・アレルギーのある人がいる家庭発案のガイドブックもある
　→食糧のリストがあるだけでも助かる

＜ケース２＞
問題　立場：被災者（市民）
大きな地震のため、避難所(小学校体育館)に避難しなければならない。しかし、家族同然の飼い犬”もも”(ゴールデンレトリバー・メス3歳がいる)一緒に避難所に連れていく？

Yes：［一緒に避難所に連れていく］家族同然の飼い犬。周囲に迷惑をかけないように家族で交代で見回りができればいいのではないか。
No　：［家に置いていく］ペットと一緒に逃げたかった他の人もいるのでは？アレルギーの人もいるだろう。

豆知識2
『ペットの頭数は人間の子供より上？下？』
人間　1465万人　ペット　1589万人
→家族同然と思っている人がいっぱいいる。

・かつての震災でも問題になっていたが気づいていなかった
環境省がペットのガイドラインを発表しているがあまり浸透していない…
仙台市の動物愛護センター
→同行避難の訓練をやっているが、それもあまり浸透していない

豆知識3
「同行避難」の言葉の意味
避難所でペットと一緒に過ごすことを意味するものではなく、避難所まで一緒に避難することを意味する。
→「同伴避難」と勘違いしている

・環境省HPでは、ガイドラインだけでなく、チェックリストもある。
https://www.env.go.jp/nature/dobutsu/aigo/1_law/disaster.html
　例)
「人とペットの災害対策ガイドライン」
「災害、あなたとペットは大丈夫？」
「災害への備えとチェックリスト」
「ワクチン、マイクロチップ等」

・周りでペットを飼っている人に広めることが大切である
・ペットの受け入れについては地域によるため、自分が行く避難所について事前に調べておく。分からないことがあれば動物愛護センターに相談する。

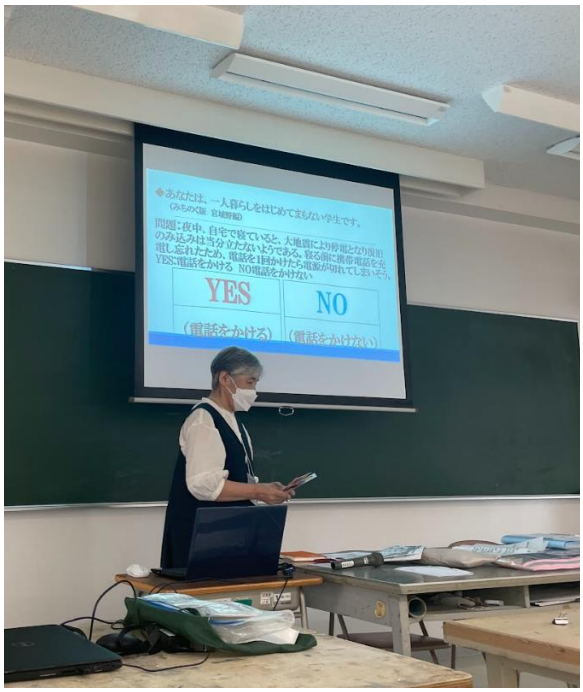
・ペットを連れた人専用の避難部屋を設けた自治体（愛知県犬山市）もあり、九州（熊本）の動物専門学校では、台風の際に人とペットのどちらも受け入れも行われていた。
→東日本大震災の状況を見て受け入れを考えていかなければならない。

・自分の身の回りの地域がどのような対応をしているのかよくチェックしておくことも重要である。

＜ケース３＞
問題　立場：被災者(1人暮らしの学生)
夜中、自宅で寝ていると、大地震により停電となり復旧の見込みは当分立たないようである。寝る前に携帯電話を充電し忘れたため、電話を1回かけたら電源が切れてしまいそう。電話をかける？
Yes：［電話をかける］1回掛けたくらいで切れる充電なら電話をかけて安全を知らせたい。
No：［電話をかけない］1回を大切に使いたい。何か他のことに使えるかもしれない。

【中級編】
問題　自分の意見(Yes/No)の問題点は？
Yes：1回掛けても繋がらない可能性がある。
No：安否確認ができない。

・災害用伝言ダイヤルやX等のSNSを活用する。
・非常時には連絡を取りづらい為、平常時から話しておくことが必要。
・近所の人と顔見知りの関係を作っておくことで災害時に協力できるようにする。



＜ケース４＞
問題　立場：住民
避難訓練３日目。トイレには汚物が山盛り！掃除をしなければいけないのは十分わかっているが、汚れるし水が不足してお風呂にも入れない。誰も掃除する気配がない。周りの若い人に声をかけて清掃する？

Yes ： ［若い人に声をかけ共に清掃する］
自分だけがやると、他に人は「やらなくていっか！」という気持ちになってしまう。
No ： ［自分だけ１人で清掃する］
自分も周りも精神が不安定な中で言い出すのは難しい。「やります！」という人が来たら一緒にやればいい。

〇災害時のトイレ使用
トイレを流すときにプールの水を使用する。
→手洗いの水はきれいな水を使用しないと避難者で体調不良者がでることがある。

〇災害時には普段通りにトイレを使えない
配管にひびが入っている可能性がある(漏水の恐れ)
→マンション・ビルは管理組合に聞いて、検査が済んでいれば使えるが、そうではないときポリ袋をかけてその中に新聞紙や固形材を入れる。袋を二重にすると水のところにポリ袋が直接つくことはない。

☆ポリ袋を備蓄しておこう！！

＜ケース５＞
問題　立場：海辺の集落の住人
地震による津波が、最短10分で来るとされる集落に住んでいる。今、地震が発生。早速避難を始めるが、近所の1人暮らしのおばあさんが気になる。まず、おばあさんに会いに行く？

Yes:［見に行く］見に行かなければ一生後悔が残る。
No:［行かない］自分の命無くしては救えない。

〇「津波てんでんこ」の多面的な意味
①自助原則の強調
　津波から助かるため、人のことは構わずにてんでんばらばらに素早く逃げる。
②他者避難の促進
　素早く逃げる人々が周囲の人に目撃されることで、逃げない人々に非難を促す。
③相互信頼の慈善醸成
　大切な他者と事前に「津波の時はてんでんこしよう」と約束し、信頼し合う関係を深める。
④生存者の自責感の低減
　大切な他者とてんでんこを約束しておけば「約束しておけば仕方がない」という罪悪感の低減。

〇参加者の感想（一部）
・クロスロードは初めての試みであったが、ゲームを通して防災・減災のために私たちができることは何かを考えることで、以前よりも防災意識を高めることができた。

・ゲームとして災害や防災・減災について知ることは、どの世代の人にも取り組みやすいものであるため、災害を前向きに自分事としてとらえることができてよいと思った。
・自分とは違う意見や、同じ意見の違う理由を聞くことができてよかった。
・色んな状況での対応を考えたことで、そういった状況になった際の対応方法や心の準備ができてよかった。
・小学生向けでやることを考えると少し難しい場面がでてきそう。
・実際にそのような状況になったとき、自分の行動は間違っていないのだと思うことができるようになった気がする。
・とっさに正確な判断にすることの難しさを感じた。（答えが）たくさんゆらぐのにもかかわらず、その一瞬が生死を分けることの恐怖と、事前にできる限り考え、備えを講じておくことの大切さを感じられた。
・実際に被災していても考えたことのない問題がたくさんあった。家族とこのクロスロードをして、災害に対する意識も皆で高めていけるようにしたい。

〇気づいたこと
・クロスロードは、答えを導くことが目的ではないということに気付くことができた。自分なりに適切だと思うことやその理由をよく考え、それを人と共有することによって、様々な考え方があるということに触れることができる。そして、もう一度自分の考えについて考えを振り返ることによって、そして、それを常に考え続けることが、緊急事態に寄り良い判断ができることにつながるのではないか。
・クロスロードというゲームを活用することで、普段考えないような災害時の状況についても、年代に関わらず意識を深めることができると気付いた。特に子どもたちは、普通に考えるよりも取り掛かりやすく、防災の授業や避難訓練の事前指導等に取り入れ、防災のきっかけを与えられる。
・クロスロードゲームはYes、Noの選択でどちらが良いというわけではない。自分が選んだ理由をしっかりともつことが大切なのだと気づいた。さらに自分が考えた以外の選択をした周りの意見を聞くことによって非常時の判断の選択肢が広がる。
・クロスロードゲームにはある程度の震災の知識が必要だと感じた。例えば今回で言うとケース２の避難所に犬を連れていくかどうかという選択。実際にペット連れの人専用の避難部屋を設けた自治体などの知識をもっていれば選択しやすかったかもしれない。

〇総括
＜非常時に即決するための準備＞
　クロスロードで二択の中から即決することを繰り返し練習できたことによって、実際に災害が起こり、すぐに判断をしなければならない状況になった際の練習になった。すぐに判断をするためには、判断材料となる知識や技能を日頃の生活の中で習得していることが必要である。ここにおいて判断材料は、具体的でありつつも、簡潔で誰にでもわかりやすいものであるべきだとも考える。クロスロードゲームの特性によって事前の備えの大切さが相対的に理解できる。一回でも考えたことがあればそれを踏まえて行動でき、自分事として捉えることができるだろう。さらに、各ケースの判断は一人で行うため、自分で考える力がつくと言える。震災の伝承という観点からもクイズ形式の教材を用いることで伝えやすくなる。被災の状況を見聞きするだけではなく「自分だったら」を想像することで、より深い理解につな

がるだろう。災害はいつどこで起こるか分からないため、自分の力で判断する経験が重要であると考える。

＜意識面の避難訓練＞

避難訓練は行動面と意識面の両輪によって成り立つ。クロスロードゲームにおいては、Yes／Noで意見が分かれるだけでなく、同じ選択をしても理由が異なることがあり、自分の当たり前が他者の当たり前ではなく、人によってその場の最善行動は違うということに気づくきっかけになる。自分が正しいと思っていることについてブラッシュアップする過程が大切であり、学んだことをどう生かすかを考え、多角的な視点を持つことが災害時に役立つと考える。また、判断の根拠には道徳的価値だけでなく、正しい知識も必要である。知識がないことで、良かれと思ってしたことが悪い方向に繋がってしまうこともある。

来年度に向けて

今年度1回で終わってしまった聖ウルスラ学院英智小・中学校英智光クラブの避難訓練視察をもう一度行い、改善点を意識した2回目の訓練視察・実施に向けて活動を行いたい。

また、クロスロードゲームを体験し、その有効性や重要性を実感することができた。そのため宮城教育大版のクロスロードゲームを作成することを検討したい。
そして、引き続き伝承施設や被災地に足を運び、震災について知見を高める活動も行っていきたい。

最後に、メンバーが所属している消防団から提案があり、小学生と消防団、大学生が協力して一から避難訓練を創り上げる活動の相談を現在行っている。もし実現したら、今まで培った経験を生かして避難訓練の活動に関わっていきたい。

学生の感想

M1年　佐々木侑里

今年度の活動では、光クラブの避難訓練が特に印象に残っています。私自身、光クラブに学生ボランティアとして在籍しているので、今回の活動は今後の光クラブにとっても有意義なものになったと思っています。これまで、学校での避難訓練については考えたり観察したりする機会が何回もありましたが、放課後の児童を守るための訓練というのは今回が初めてでした。放課後の学校という大きな組織でないとき、特に特別活動をしている児童の避難というのは考えたことがなく、新たな視点であり新たな取組でした。どのような形・結果であれ、今回の光クラブでの訓練があったことで、次の訓練につながると思います。そして、訓練をつなげること、訓練や避難、防災について日頃から考えるようになることが子供たち一人一人が自分で自分の身を守ることにつながると考えています。そうした生きて働く防災に関する知恵を身に付けていけるような活動を考えていかなければいけないと思いました。

大学院に進学してもこのように学ぶ場を提供してくださり、温かく迎え入れてくださり本当に武田先生はじめ視察等にご協力いただいた皆さん、ゼミ生の皆さんに感謝しています。災間に生きているということを意識し、これからも学び続けていきたいと思います。

3年　石川あいり

私は今年度で3年目の取り組みとなりました。昨年度から見たいと思っていた大谷小学校の下校時避難訓練を視察できたことが、今年度一番印象深かったです。児童が学校ではない場所に居ても命を守れるように、通学路の危険や避難行動を「考える」機会はとても大切なものだと実感しました。私は「避難訓練」は学んだことを繰り返し実践する従来の避難訓練も大事だけど、児童が学んだことを理解して、考えながら取り組めたらもっと効果的な活動になるのではないかと考えました。本当に災害が起こったら瞬時の判断の連続になると思います。「考える訓練」をいつか実践してみたいなと思いました。

また、311ゼミ1期生のおはなしを聞く機会があり、現場の貴重な体験談をお聞きすることができた。教員になった時に防災教育についての引き出しを増やすために、ゼミの活動でもっと防災に関する知見を深めたいと強く思いました。今年度もありがとうございました。

3年　綾部愛美

今年度の活動を通して、「もし何かあった時にすぐに動くことができるのか」と日常的に考えるようになりました。前年度までの小学校における避難訓練視察やアンケートを通して、事前指導や回数が重ねられた訓練の大切さを学びましたが、もし想定外の事が起きたらと考えると、様々な場面を想定した避難訓練がもっと必要なのではないかと感じていました。このような時、素早い避難をするには「知識」と「判断して動く力」が求められます。このことを踏まえて、クロスロードゲームのような活動を取り入れた防災教育は有効だと考えます。実際に様々な場面の避難訓練を行うのが難しくても、このような場面の時にはどうするのかと理由と共に考えることで、自分の考えを見直し、災害時に素早く命を守る行動に繋げられるのではないかと思います。これは、311ゼミ1期生と語り合う会で話が出た「児童が自分の身を自分で守る防災教育」とも通じ、防災教育を生かした避難訓練を重ねることで、避難訓練の質をより高められると考えています。避難訓練の中で、逃げるという行動についてだけではなく、防災教育を通し、自分で学校の危険な場所についてもっと考えたり、学校という場所から視点を広げ、家や地域とも結びつけたりすることで、より防災の輪は広まって行くと思います。また、自分自身がもっと知識を身に付ける必要があることを感じる1年でもありました。将来教員になり、子どもの命を守れるようにするために、もっと学んでいきたいと感じました。ありがとうございました。

3年　伊藤紬

今年度の活動では、光クラブでの避難訓練の視察という貴重な経験ができました。自分が教員として現場に立ったとき、自分の命はもちろん、子供たちの命を絶対に守らなくてはならないということを強く意識しました。訓練後の振り返りにおいては、これまでの避難訓練班での活動で得たことを生かしたディスカッションができ、さらには新たに参加してくれた1年生のメンバーからの意見によって、多角的な考察ができたことで大変有意義な時間になりました。また、クロスロードゲームでは、即決とそのためのしっかりとした根拠を考えるという経験ができました。避難訓練を考える際には、今ではないいつかのためという、先を見通したものが多くありましたが、このゲームでは災害が起こっている「今」を想定して考えるという新鮮な取り組みに思えました。非常時において重要なことであってもこれまで知らなかったことがあり、知識不足を反省しました。一方で、知っていると思っていることでも情報をアップデートすることの大切さに気付くことができました。活動を通して、避難訓練は避難の体験をして終わりではなく、その後の振り返りがとても大切だと学びました。学校での避難訓練が充実した学びの場になるように、私自身の理解を深めていきたいです。このほか大川小の視察や311ゼミの先輩方のお話をお聞きする機会もあり、たくさんの方と共に学ぶことができました。ありがとうございました。

3年　舩山雄太

今年は私が３１１ゼミと避難訓練班の活動に参加して２年目になりました。１年目には宮城県内の様々な場所にある小学校を訪問し、その学校で行われている避難訓練の様子を視察した。その中で避難訓練を行っていくにはその立地など周辺環境や通っている子供たちにあわせたものになっている必要があるのだと感じていた。今年はそれを受けて学校やそれ以外の学童といった環境で避難を行う場合どのようにするのがいいのかといった様子を視察した。また、今回視察した学童で避難訓練は今まで行ったことがないもので学校という組織の中で避難訓練を０から作っていった際の様子についても見ることができたと思う。そのような視察を行う中で私が学んだのはやはり経験の大切さである。今まで学校で行われている避難訓練をいくつか視察してきたが、どれも子供たちも先生方もスムーズに行動しているように思った。そして今回学童で行われた避難訓練を見た時に先生方や子供たちの動きがまだ定まっておらず迷いや改善の余地があるのではないかと感じられた。そのような状況から普段から避難訓練を行い、避難の手順やそれぞれの動きを確認しておくことは重要なのではないかと思った。またこれは逆に考えれば、普段避難訓練を行っている学校でも実際に普段とは異なるシチュエーションで避難する必要が出た場合には迷いや混乱が生じるのではないかと考えることもできた。ちょっとした日常生活の中で自分の身を守る方法を考えることで避難訓練の中で生かすことができるようになるのではないかと思った。

そして今年は避難訓練班の活動以外に原発班の皆さんと福島第一原子力発電所の視察にも同行することができた。実際に行ってみて感じたのはいままでテレビでしか見たことがない景色が広がっていたというものであった。原子力発電所内はもちろんのこと、その周辺のもともと住宅街であった場所も震災当時のまま時間が止まってしまっていると感じる場所が多くあった。また、放射線についても場所によって急激に数値が上昇するところもあり、広範囲に影響を残したのだということが分かった。放射線などのような目で見ることができない災害にどのように備えていくか、どのように対策していくかはまだまだ分からないことだらけだと思った。また、改めて東日本大震災の爪痕は東北各地に残っており、復興は時間がかかることが分かった。そして政府、自治体にとっての復興とは何なのか、地域に住んでいた被災者にとっての復興とは何なのか、考える機会になったと思う。

3年　二階堂颯映

今年度で2年目の避難訓練班の活動になりましたが、「必ず起こりえる災害」に、事前準備としてどう備えるかや、発生した後の対応の仕方を、個人としてだけではなく、学校の教員という立場になったときのことを想定して、考えを深めることができました。具体的には、大川小学校の語り部活動をされている佐藤敏郎先生や、311ゼミを卒業されて、現場でご活躍されている先生などのお話を通して、一人一人の体験は様々だけれども、もう二度と同じ悲劇を繰り返したくない、命を守りたいという思いは共通しているのだと思いました。また、そのためには「日ごろの生活での働きかけが大事だ」、「だけれども防災教育にかけられる学校での時間は限られている、、」という現実的な問題についても知り、いかに現場の先生方が工夫されて、取り組まれているかということにも触れることができました。また、今年は大東文化大同行視察にも行き、宮城県での教職を目指すがゆえに知っておかなければならない、災害が起こった際の人々の思い、そこに合った光景などに思いをはせること

ができました。また、クロスロードを用いて、あらゆる立場の人といざというときの対応について考える機会をいただき、常に考えることも大切ですが、その手段ついても工夫することの重要性を感じました。これらの経験を通して、まずは自分事として震災を捉えることはもちろんのこと、それを伝え、子供たちに自分たちで考える機会を提供する効果的なやり方についても、今年度の学びを通して考えていきたいと思いました。

3年　村上真綺

前年度までは学校における避難訓練について視察、検討してきましたが、今年度は新しく学童における避難訓練を視察しました。学校と学童では、そこにいる児童やスタッフ、児童の活動形態が全く違うからこそ学童で避難訓練を実施することにはやや難しさがあることを感じました。新年早々大地震が北陸を襲ったように災害は時間を選ばないため、比較的避難訓練が多く実施されている「学校にいる時」以外での避難訓練の検討は必須だと考えます。訓練をしてみようと踏み出したその行動が減災へつながることを意識しつつ、ひとりひとりが災害が起きたらすぐにファイティングポーズを取れるよう、光クラブの訓練のブラッシュアップにこれからも向き合っていきたいです。

また、ゼミの時間に「水俣に行ってきた」「大東文化の視察に行ってきた」「淡路に行ってきた」と訓練班のメンバー同士で随時プチ報告会をしたことも印象的です。防災についてここまでフランクに話ができる場は少ないのではないかと思っています。こうやって自分の経験を伝え、メンバーの話を吸収することで、将来私たちが教員になった時また次の世代へ伝えることができます。そのため、この場を大切にしたいという思いがあります。

今年度も武田先生、訓練班のみなさんに大変お世話になりました。感謝しています。来年度は、訓練班の継続、能登半島地震のボランティア、昨年度沖縄でお世話になった大熊未来塾のみなさんとの活動、311ゼミnew teamとして立ち上げたいと企んでいる広報班としての活動など大学生のうちにやりたいことを無理なく全部やります。

3年　釆澤七海

今年度は、光クラブの訓練視察・大川小視察・311ゼミ1期生との語り合いに参加しました。光クラブはマニュアルはあるものの、実際に訓練を行ったことがなく確認のために初めて行う訓練でした。スタッフの方々が有事の際に子どもたちの命を守るために行われたことを思うと、次につながる提案が出来ればいいと思いました。

大川小視察で佐藤さんの話を聞いた際、最善を尽くすこと・訓練について、自分や大切な人を死にたくない・死なせたくない気持ちで登場人物に血を通わせて考えることが大切だと学びました。マニュアル通りで本当に救えるのか、自分事として考えていくべきだという話もあり、私はマニュアルの確認をした光ク

ラブの訓練と繋がる部分があると感じました。311ゼミ1期生との語り合いについては、若手教員だからこその悩みや苦労を聞くことができ、教員という職業は大変だけれどやりがいもある、やっぱり教員を目指したいと思った会でした。特に特別支援教育について興味があるため、学校全体での訓練の前にさらに何度か練習をするといった現場の話を聞けたことが嬉しかったです。来年度もゼミに参加し、継続的に関わっている学校の避難訓練の視察・その改善点提案をしたいと思います。

2年　本間陽菜

私は東日本大震災を宮城県で経験してはいるものの、3.11ゼミナールに参加するまで、ニュースやドキュメンタリー番組で東日本大震災について知る程度でしか向き合ってきませんでした。ここまで全力で東日本大震災に向き合ったことがなかったため、とても役に立つ、学びが深まる活動でした。2年間ゼミ生として活動していく中で「自分の命を自分で守れる子どもを育てたい、子どもたちの行動で周りの大人の行動を促せる、周りの意識を変えられる児童を育てられる教員になりたい」と思うようになりました。東日本大震災を経験した私たちの代だからこそ説得力のある教育ができるのだと思います。

私自身今年度の活動では、気仙沼市立大谷小学校の下校時避難訓練、石巻市立大川小学校の視察、ゼミ一期生との語り合いに参加しました。実際に参加し、お話を聞いてみて、「避難訓練の大切さ」「日常的に備えておくことの大切さ」「積み重ねの大切さ」「教員が児童に働きかけていくことの大切さ」を身に染みて感じました。実際に、足を運んで目で見て肌で触れて感じてこないと分からないことが数多くあることを改めて感じています。ゼミの活動に参加したことで自分のなりたい姿に一歩近づいた気がしています。津波の被害が起こる恐れのある大谷小学校の児童・教員・保護者の防災意識の高さに刺激を受け、大川小学校の視察を通して避難行動はどうあるべきなのかを考え、ゼミ一期生・先輩教員との語り合いを通して、防災教育の現状と課題について理解を深めることができました。将来教員になったときに自分が頑張るべきこと、力を入れるべきことが明確になったと感じています。

これからは「自分の命を自分で守れる子どもを育てられる教員になること」を目標に児童にどう働きかけたら自分が今まで学んできたことが伝わるのか「伝え方」を考えていきたいと思います。これからも東日本大震災と向き合い続けます。今年度も学びの深まる、貴重な機会をありがとうございました。

1年　菊地愛香

私は今年度のゼミ活動では光クラブの避難訓練に参加し、避難訓練を実際に自分の目で見てみると、避難指示を聞いてマニュアル通りに動き、一見目立って悪かった所は無いように思えました。しかし、避難訓練を終え、同じ班の方と振り返りを行う中で、避難時の子供の様子や、先生方の指示の仕方など、自分では気づかなかった部分が数多く指摘されました。

この振り返り活動では、想定外のことを想定して出された意見が多く、避難訓練をなぜ行わなければならないのか、根本的なことを考えさせられました。この話し合いから私は、マニュアル通りに訓練を行うのは、良くも悪くも「普通」だと思いました。訓練時に大きな失敗はないけれど、もしものことが起こった時に臨機応変に対応できるとは断定できないと気

付き、そのような無難さを選んでしまっては、守れる命や救えた命を失うことになりかねないと私自身気が引き締まりました。この活動後、避難訓練を何のために行うのかを考えた際に、想定外を含むあらゆる可能性を考え、情報を共有し、訓練を形式化させないために行うのだと考えました。マニュアルに書いてないからできなかった,分からなかったでは取り返しのつかないことになります。回数を重ねる毎にレベルアップしていく訓練が本来行われるべき訓練なのではないかと思いました。

また、東日本大震災を經驗していない子供が増える中で、その様な子供を恐怖に晒して防災意識を高めることは簡単です。しかし、東日本震災を知らない子供達だからこそ、震災は酷く辛いものといった固定観念に囚われず、復興までの軌跡や地域の繋がりに目を向け、広い視野で考えて欲しいと考えました。今年度の活動は自分自身の防災意識を変えてくれ、今後の防災教育についても考えられ、とても実りある活動でした。

1年　上野愛莉

私は311ゼミナールに参加したことで、震災の記憶を多くの人達の力で伝承していくこと、常に様々な状況を予想して災害に備えることの大切さを学びました。

ゼミの活動で石巻市の震災遺構である大川小学校を訪問した時のことです。元の写真と今の変わり果てた小学校の様子を見て愕然としました。大きく曲がった校舎の柱や全てガラスが吹き飛んでしまった窓を目にし、誰も想像できなかった惨劇が起こってしまったのだと痛感しました。早く高台に逃げられなかったのか、先生の指示を無視してまでも避難できたのではないのかと率直な疑問が挙がる中、現地の方の話を聞き、突然起こった地震に適切な対応を取るには多くの知見と様々な状況を想定する力が必要だということを知りました。

いつ何時起こるか分からない、いつ起きてもおかしくない地震に私たちはこれ以上大きな被害や大切な命を失いたくはありません。そのためには震災を経験した人、津波の被害に遭った人、災害を乗り越えてきた人がこの記憶を多くの人に伝えることが大切です。想いを共有し、いざというときに助け合って命をつなげるよう、大きな震災が起きた時に少しでも己の身を守っていけるよう、東日本大震災を経験した私が記憶を伝承していき、その輪を広げていきたいと思いました。

また、学校避難訓練班としてウルスラ小学校学童の方々との避難訓練に携わったことも、大きな学びの一つとなりました。実際に現場の教職員の方々とお話する機会があり、避難する際の経路や保護者への引き渡しの方法など、私が考えていたよりも細かく避難について考えていらっしゃったのがとても印象的でした。子どもたちの尊い命を守るために尽力なさっていた教職員の方々を見て、自分が将来教員になった時の覚悟を改めて認識しました。初めて学童での避難訓練の実施ということもあり、念入りに企画されていたのですが、実際に避難訓練・引き渡し訓練を行うと、様々な改善点がありました。

例えば、列になって避難する際に列が途切れてしまった点、避難経路が遠くて時間がかかる点等、やってみなければ気づかなかった部分も多くあったと思います。意見交換の際に、他の班員の鋭い意見や多面的な見方からの指摘を受け、災害は常にいくつもの場合を想定しておく必要があるのだと感じました。型にはまった訓練をしていても災害が実際に起こってしまえば、最悪の事態が起きる可能性もあるため、臨機応変に対応しなければいけません。教育現場で動くには、覚悟と柔軟性を持ち合わせる必要があると切に感じました。

311ゼミナールの活動を通して、災害や命の尊さ、最悪の事態から目を背けず考え共有することの大切さを学ぶことができました。多くの知見と体験を得られた、良いゼミ活動でした。

1年　小原梨紗

私は宮城教育大学入学前から合格したら311ゼミに入って震災遺構を見に行くということを決めていました。無事合格し、311ゼミで活動をすすめていき学校避難班に入りました。学校避難班では、聖ウルスラ小学校の「光クラブ」避難訓練、クロスロードゲームに参加しました。特に私の中ではクロスロードゲームが印象に残りました。生死に関わる究極の状況の時に自分はどのような判断をするのかを考えるきっかけとなりました。自分の選択とは違う選択を選んだ方の意見を聞くと自分の頭にはなかった考え方がたくさんあり、私の世界が広がりました。

私は犬を飼っているのですが、クロスロードゲームで「犬を避難所に連れていくかどうか。」というテーマになった時にもちろん迷わず「連れていく」という選択をしました。しかし、「連れて行かない」という意見の人の考え方も意見交換をすすめていき理解できました。これをきっかけに今まではしっかりと考えていなかった「震災の際に犬と一緒に避難するためにはどうするか。」ということを家に帰り、すぐに母と話し合いました。避難所関係だけではなく犬用の避難バッグもつくり、避難をスムーズにするために準備をすすめるきっかけにもなりました。

私は将来小学校教員を目指していますが、私が教員になるころには東日本大震災を知らない児童ばかりです。ただの教科書の歴史になってしまわないように311ゼミナールで学んだ知識や経験を子どもたちに写真などを交えて伝えていけたらなと思っています。次年度も311ゼミナールを続けていきたいと思っています。東日本大震災と向き合うことはもちろんですが、今年早々起こってしまった悲惨な能登半島での地震についても311ゼミ生として真摯に向き合っていきたいです。

1年　千葉大輝

私は、東日本大震災のとき幼稚園の年長で卒園間近でした。自分の地元、石巻は震災により被災し、13年近くになる現在でも復興に向かっています。また、大川小に入学する予定だった友達が亡くなっています。そのような事実があり、震災や防災に目を背けてはいけないと思い、このゼミに参加しました。

ゼミの活動では自分の身になることがたくさんありました。そのなかでも、大川小に実際に行って、佐藤敏郎さんの話を聞いたことが印象に残っています。これから教員になるために佐藤さんの話はとてもためになったし、身になりました。これからは震災だけにフォーカスするのではなく、さまざまな災害に対応できるような取り組みに積極的に参加していきたいと思いました。ありがとうございました。